式亭狂文集稿本　三卷

貴重圖書
WA 19
14

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14
ガラス使用

貴重圖書
WA 19
14
1

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用

式亭狂文集一名戯想文

上之巻

貴重圖書

昭
9. 5. 4
購求

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用

式亭狂文集序

稗史脛說。事固荒唐而無徵。虛構而無實。要之寄勸懲於諷諫。寓情僞於世態焉耳。亦何事之問其有無。若夫宣淫敗常。蠱壞名教

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14
ガラス使用

之談。吾無取焉。旋戲道人
自少至老。著作近乎一百
餘種。舊寄之談。新快之說。
皆出於道人獨叙之筆。能模
寫人間喜笑怒罵悲歡離合
之情景。終歸之勸懲焉。是以

大都通邑。及遐陬僻遠之彌
莫不戶挾其書。人挈其名者。
嗚乎亦盛矣哉。道人已賦
玉樓。宰木方拱。嗣子小三
馬集其遺文。鏤傳之子
世。余再三披誦。益知其博

大縱横之文。惜意運志之
巧焉。而悼道人之不可再
覩。嘉其子之善繼先人之
志。代而告之。

庚戌四月　綾瀬苑田梓識

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』　請求記号 WA19-14

ガラス使用

夫和歌不依諧体。其事
物多形。其情多溺。
変之欲。寓文章。
仮形容。逸豪放。
而寓形。也。大
自蜀山。
式亭不諧。序之。

詩歌に合作を毎に寄ふ
四十年来に世事と共に
来る德基之父の筆の孤
篇を失はんるを惜て
拾て文集と
編集せんとす序詞
を予に求む憐を拾

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

嘉永二乙酉年季秋

美濃國[illegible]人

渡岡輝松子書

渡岡

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14　ガラス使用

此図ハ先考ガ
七年忌ニ亡母
ちづめ社友等
はうて五渡亭
国貞子ノ筆を
りくめて肖像
をうつし金蘭の
友らし狂哥堂
真顔翁画賛
ひし画軸を新ル
今又豊国大人の
筆にうつして耶
青顧の覧ふ
備ふるて文よ
り七とせの春と
あり

式亭三馬肖像

豊国筆

陸奥の風吹傳
式亭は名世み呼りし
ちよ七ちゝ彩は素とり色あうゝ
絵書ゆゑは門を張ハちり
変み本所庵ハ骨稽の本居
三馬翁戯作ゑるる作録者
あるうれ東都一番の図画大士
ゆうまれ
去ちけ以は
花ちうるかぶ
江戸のこの
ちもゑのちうを
代ゝみ手向も

狂哥堂

式亭狂文集

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』　請求記号 WA19-14

ガラス使用

凡例

余先考ゝ[illegible]須ゝ今ゝ[illegible]二十七年の[illegible]文政五年壬午春睦月の上旬なり[illegible]不肖十一歳の[illegible]祖父ゝ母ゝ[illegible]若育ゝて成長ゝ[illegible]社友等[illegible]年先考の[illegible]戯作の序文狂帋集[illegible]書画[illegible]の交書画の[illegible]序[illegible]の交[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

小秘おくん之益大きき事ふしぬべしとの仰せ本編の口画とハ大うしぬ

○席上よりて弟奥の狂文狂歌の稿かくて家の傳ぬし多ハのゝ比そハ法枝を好事法実子当屋くるゝとをつぐ余庵投合る二編の集冊ハ加へ

○猶家の粃稾を次編よりて本編ハ狂歌集のほ書出すの猶石家を潰河の文且稚くの序文二行ハ狂文とのつも

○年ハ古今法実回りくハ改正ちつぎくハしあしバ年毎の序次を定めバ

○當時ハ世の臺謡時様語或ハ流行事物を文章ハ如ハ弟今今の人くハ永解難文ハ弟ハ仲ハ委細ハ上に注解を附て解り易ハしも

○先考ハ廿七回忌の春集冊なりしハ去る事ハ三年後て此ハ三十年ハ上木なりぬ因て凡例の文ハ二十七年のいまゝを書り三十三年の忌ハ三年の忌ハ三年ハ世の習俗ハ今事髮市ハ及ぶ故ハ下之老猶名家より賛河の狂文狂歌ハ悉く三十三回忌追福の文ハ擬ハり先考ハ没後より今ハ丙辰三十年ハて集冊成て廣く世ハ布変とハ為ぬ先考地下ハ知て之ハ歓喜ハ為ぬ

嘉永四年辛亥孟春

不肖 式亭小三馬薫沐題

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』　請求記号 WA19-14　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14
ガラス使用

狐の好郎買ふ仰ぐ狂云ふ言ごと
木の葉は小判程の前ちふを
いまぐ化ぬぜ
名ふ契情ふ
八の仕ふ家人ふゆづを
て百目程の蠟ふをのうれ
穴の格の蠟ふ
金を借ふ
あ
牡蠣ふ
大入屋の妻ふ
ゆ
ゆ
ゆ

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用

式亭狂文集 一名 戯想交

本町庵三馬著

江戸

○四方八大人は利者枝葉を壽く詞

夫たれかこゝろさうゝ場ふりつもる人の心〳〵を種とこそ見せの
ひきりはよろ敷のたゝひざとぞ有なる。花ふうふをかりる
水ふきもむ和宿いづきこの哥をよみざりける。力持をる頼もたゞしこそ
お兄はちを勤うし。鈎針屋の針をゆ辻番の持ほぐふようこゝ
子は筋の吉是が按摩より。土弓場は娘茶見世の姥もぐ男
女は情を探りて。猛き和唐内が操の糸をやもらげ。見る鬼
娘の心をも感ぜしもるハたれこの方なりけれバいつ〳〵より狂
哥義貫の面倒格永ゝ月を経ぬ〳〵人の絶ざるハ

格の上ふ鎗ふ絶ざるふ如くしてし。組物の糸細工連綿ふたる
ハきりよくこ斧ふ尽ざるごとく水の面ふ船の曳ざるに回ぎして。曲突
の心太絡繹としてきりぬ。狂作言を狂ぎ〻ふ狂ぎをあるをを
ふ〻ふ。廣小路の火見櫓廣く丈高きをよりくりて。祖乃呂吹
地面投ぎしを角ら金猫ふ驚き。天ふのぎれば角ら玉屋乃声ふり。
温飩屋の二八明歌。八文屋の二四代集ふ接て。豆腐笠屋の紙数を
拵るふ四季恵雛の歌ぶのかゝれば。八百や菊の外残稗教懺悔〻
めもりふ辣菜。大山蕨の不回丸。何ぐも角ぐも擇取て十九文選
の庵ざ角も。源氏おこし法國ぶりもの。よく味ひてよく薬乃潮
来節ものふ拍ぬ。五色茶漬の幾いろも。さらく〻と白姫り
しく。さらびともらやびともなくて狂哥歩法歩の看板廂已法

内回印。四方拍傳の妙ふ行ばや。まづさらじくる数〻を心脾
腎の三の切テンツ天鈇羅のやらいこせよりり。チリテツ小ちんぶ霊宝ふ
立るまぐ。百粥の名ふ行き人成ものもの。美豊後祭文。さるを長
唄秀りやを新内路札。俗ふ新狂哥。紙ふ煮麦店
左始を俗壷料理茶屋。乗くお回ぶの小ちもぢんぶりの方ま
也ちハ馬谷燕寿字を瑞龍。とんぶ〻きりふ切口上。蔦直み
舌戦をるる。此筆陣ふもうてる。人〻のかりておの〻狂哥
ふよこ得ざるくふとゝ。其たれうとの縁起。角来ハ事長
くれば〻みいを抑制帳〻。生る内霊宝ふハ行ふ。狂哥
堂の梶ふ玉行。さらび判者の名を法ぶやとふ行。恵のハ
大人ふいう〻ようびふ博〻〻。節ふ〻ひをまるハ人藝の中陶

くちびさきたぐひふかうぐいハ重垣の香物を花押の金紙を
ぬぎ捨て軒並びの妓結家を揚し。十五点の哥貴ハ牡丹の
巻龍を尽し。川向ひの妓の内場を欺くさんど景物を得る
こと吹矢はかりなりもづれふたつ。言点をうる事ハ平清ぐ占
をうたのこぶし。嫁くらもれからもはつき。更紗国商のうちをバ
更るもいそぐようをふやなくくしもつの舎筆を張ハさんとくはつ
きる哥ハ三千余首。船うり敷ハ地蔵菩薩の新の紙のかぎるけ
いかをうばく。来ばくふくハ八百余くく。搭ようり納り大明神。祈願の人の雑
ををうふ所はし七分三分はのはあしいる在合わきの嫁麿をくすれ
ば。五字七字のてふををふ。狂哥ようは俳味をはつをうる物をよみ
ものを判じようふ西はうて老ることを曲馬海も鞭を捻べく。書く

ふ無はうて歩きことハ砂画工も筆を投べ。ぱハ人の人くの口乃
輕きふおそれてハ。淫業師も大坂くのぼり。筆は四ふのれちびとく
猶樂ぶ。博多くを芭蕉宵菜芭蕉ふ俳諧体
のようく哥をうんせを。蹴宵菜の蹴をも従つべく。芭蕉学の親の系
因果をくるはふにもをひて。校義ハうふ判若なのごうもハつあ
をのうくはうの数世よめづしき上手はうもようぶるんおのくひとりの
能はうて。哥はをゆうハきあ。なてど。歌句のはうくふめづうあるハ。
手拭の新形と錦繪の新版とはをはうをひ。翁の耳搭をも用ひび
して。古今を一体ふやとう。紅毛服装をも借らはうて。和漢を二番
ふんあ開き。江戸の川水流行ふきれぐちて。伊勢の石垣はあ兵でる。
幾代つきをあ絆ようる。名を高く立川朝市ふ。五十嵐の酒を芳く

名代〳〵とうめき深刺〳〵と唸ぜんれば。人こうれはぢと搆ゆ。生盛舎の
めでたき限を。毎〳〵の永ゆ。ひのまりて。放〳〵意めとうゆ代まで。
ゆ。ぢきに四方ぢきに。一期安全けんどうの。義ふ出る文字ゆ
似て千宗万来業〳〵業。ちこひうふ富貴長命九ちとゆ保ゆうう
ゆ内屋ゆゆ嗜ち巷悦ち。一山四文の口さゆゆ九十ゆ二馬ゆ出文ゆ。
おうう味紙の大極上。ひつひハぢうめ川口屋。太白味の狂文ゆハ。二本
〳〵ゆ義他若ゆ。そゆ〳〵こ志ゆ〳〵ゆ小錫杖。ゆゆひゆ志ゆふゆ
立て。今日の吉名代ひゆめ上書る。八人の大先生ゆうう廣ゆ名
物ちゆれゆ出〳〵ま流ゆる品ひうう。義ちゆちゆうゆ歳活の意ゆ
倣て。そゆうハゆゆ〳〵てゆう志ゆん世ちうと狩榜の搆ゆ志の吟ふ
。めでたゆゆ利者の数を面國のハッ法ゆゆふゆきゆ〳〵ゆ

○雷馬先生詩を水〳〵ぞめを寿く詩

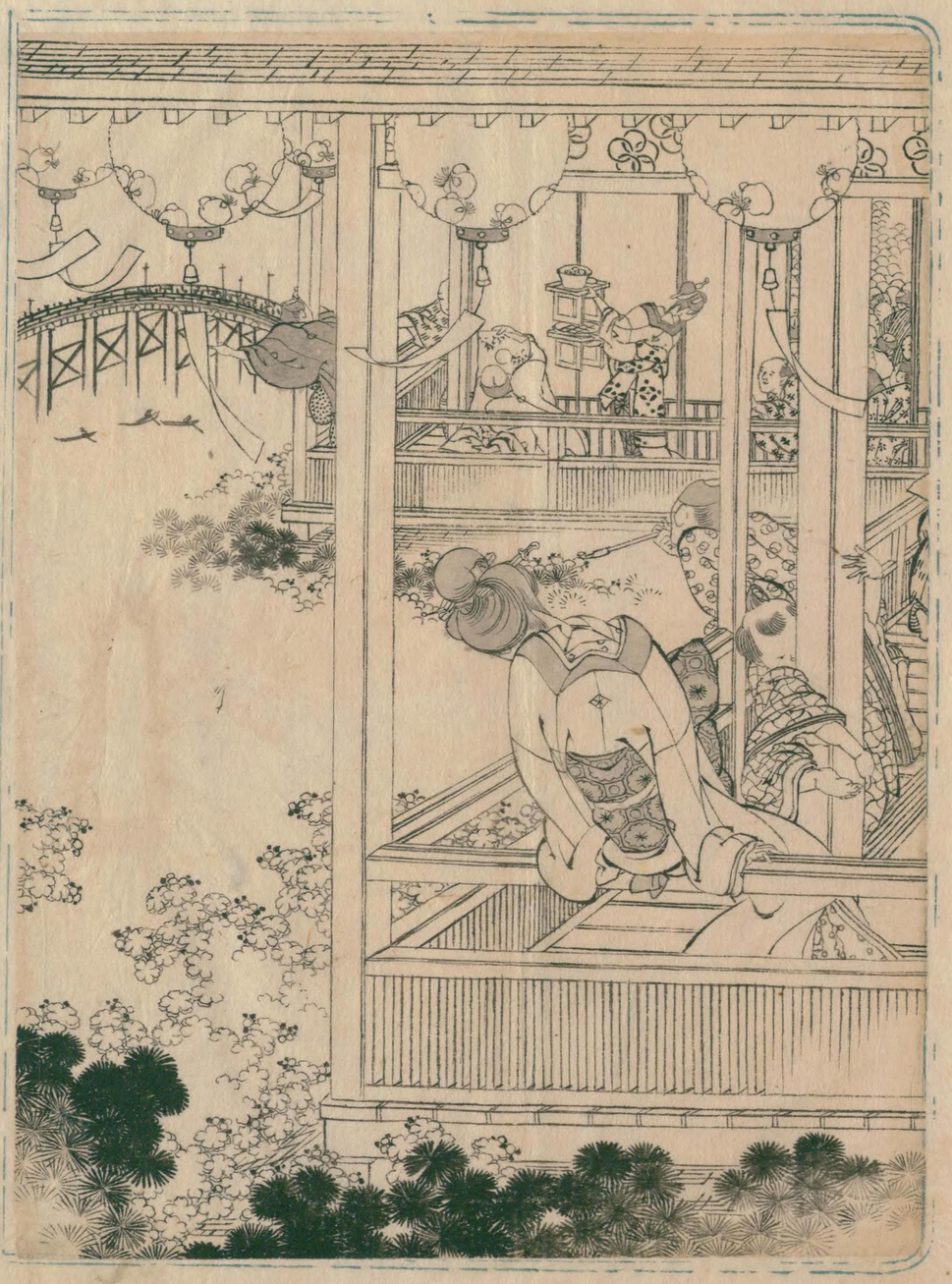
立川淡海樓とゆ何人ぞ。江戸で市川團十郎を贔屓の親玉ゆう
ぶゆゆ名ま。語路ゆ〳〵ゆ。ふゆりて。称号ゆ〳〵ゆ。此翁我義他の
道ふゆ。ゆて。古法ゆりゆ水味ゆ。ゆべゆるゆゆ。風来ゆ二ゆ酒
黄ゆ。ゆゆ。春町万象亭ゆ滑稽ゆ倶ゆ人ゆゆ。ゆれ。
鐵斧堂ゆ。ゆ。ハ。ゆ来ゆ。雲外ゆ。ゆび。亀山人ゆ。ハ自隠ゆて。泥
中に出ゆ。京川の流ゆハ絶ゆ。杖ゆ杖ハ折ゆて。友ゆ方ふ出ゆと
いぶ。獨り楽しゆ。古生ハ人生七十の上をゆゆて。古来稀ゆゆ。
者世ゆうゆを考ハ十八大通ゆ集ゆ。実ゆ重ゆ
在男今ゆ行ゆ。月代ゆ。ゆハ。性ハ。ゆ。滑稽流行者
京戸ゆ。筆ゆ採て。遊者ゆ。ハ行住坐臥ゆ遊者ゆて

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14　ガラス使用

仕人ふおろかなるぞ。ちやうこの愛いつらにまち筆隠れ無きまちまち
太平楽人なり〜といそぐに我おのれ〜と書ちらす流の狂の狂文
世ふふうまいね義白俳文或ハ操りこの芸妓の葉ぎ宝の蔓ぎ狂ロふ
〜祖の名を唱きそる。むの〜のぢ世さ面ありうり。ちうも世の中無
開山ぢいが山を開きてよりうしのこと流を汲ぎ人影〜く流きてそり
と野ぢ。鑑きめでるきを代ちうが〜ぐ松を三川の相ぎ世ぎ夫婦
めぐる〜松ひ〜去若くなれいよく富ぎ産業ふまれ〜ひちる本を業
行く袖の振合。これ小絶生のえん馬が俳一伝の流きふよりぢて。拙者人が
俳俳を愛る人高くせん巻ようう一粉の巻をそのこなる旅うをぢの偽名
を術ふ情ぐるる功ぎ。七事もうるね者の旅舎狂のと義緒の面図物
ぢ物ふ者りてる人ぢ。二絵の鄙ぎ巻ぢる俳俳をれるをみあぐる生

の毛氈を出ふ縮緬の婀娜ぎるふ。朱を奪ひるしぶみくもぐ皆名然
の人〜ぐ〜を。葉を汲ぎふ俗ぎ米若ぎ俳ぎ巻後番ぎ只のおやぢみ〜ぐ
ぢ面白きふ心〜ぐ〜ぢ。ものぐ〜こふぬを蓄きぢ昼食の給仕人千日
蓄ぢ里ぐ〜間ぢ蓄汁をお盗ぎ〜ぐ麦ぎ〜ぢ上俳苦の
ぐ立ぐ巻ぐるもをぐ。只ぢ舎ぢおぐやぐある事ぢ物の交易千
鄙劣の祖をきぐぢ。生涯の喧嘩ふ悪態の猫ぎきぐを長閑ある巻
景色ぐいぢ。さるぐ〜に物を忘れるぢぐ。上戸ぢ拳のぬけるが
ぢぐ〜物師の直ぢ戸ぢ苦をのぐして義世俳を紡ぐ庶の間の桃
太郎ぢ怪をぐして養園ぐを嘲ぶ掛物の縫ぢ鄙ぢ富ぐ〜ぢ独ぐ
ぐぐ鄙ぢ独ぐ妻ぢ猫ぢ学ぐ〜ぢ。ぐ〜ぢ未猫生ぢ人芸の赤坂を一人
ぐぐ〜ぢ顔ぐ〜ぢ。百人芸の四若ぢ〜ぢ変ぐて後教ぐ〜ぢをぬ〜ぢて

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14　ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14
ガラス使用

新化の義吹の道中ハ馬と名のるも義てようし。樂と名のるもたのしき
ようの。奥ゆかしき歌の調いづこ屋。よく人を和ちゆ魚ま和助と唱へる僧称
を。看板かゝゲれなきおゆ石の岩見銭二升の絞店ハ名ゆ名ゆ篤
実者ふ。ちもつのせうる樂隆石。紅の写ゆ。ちらでハ宿ふ石ぞ。ホを都な
るゆ。ゝらくおやぢ。雪のふるゆら杖を嬉しゆ。月ふゆゝゝうふ。ふゆん酒
さゝゝほ程ゆめゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

似る交りふてハたやすくかなハぬ事なり。英雄豪傑の交り
薄しなどいふハ情なく世間のうそ。江戸川の水を飲ミ江戸前の魚を
食ふ者。最とくさ〻ま所なりされど古びたる奇特を
無ぶく〻ふぐいふ言を知る事なり。伯牙ごとふもつて行ひて。
魚と水との交りを。狂歌うちんとを思ふ。水魚連
といふことを言ふ。ほんでに。ふぐ連をひくなり。夢ふおん
てハ法ハの〻交りのごとうなのこと。なる中ハ。海富を投るなどのハ。
物惜なる万ハ様。ちと咳しこハゆゑ。盃をのゞて天ふ盟へ
ハ。天骨ちなき海義をもつて。脊をもつて地を約へ。地ロちま
ちくの〻出ず。是則天神地祇ハ武産ハ。水魚連の幾久しく。
中もつまゞきちうなるべゝ。四海皆兄弟。水と魚とのたとへ

ぐさ。紀中まれだ。ぢのち離るゝ人ハ。交ふ他人と思ふべうぞ。ふ狂
盃の。茶ふ交れば赤くなるゝ。戦場者ハ狂奇連のくゝとハ。もうふ三
軒茶屋ハ。ちもて仁義禮智信の五人組をとゞめ。埜紙の端
ふ筆をとゝ。水魚連中後日ハ。藤ふ。ぐさまれたのうき魚。

崖湯のう則深ハ江戸気をたのうき
水遊ハ。ふ金ハ

○狂奇擬継集序

嵐山ハ。ハ交して。川越ふ酌しき。名ハ。味ぐ玉笛作
ふ。呉郡ふ。ハ。ぐ。宝東ふ。ハ。ふ。名ハ。人喝て裡衣とふ。
玉笛を和船亭と号け。裡衣を和錦亭といふ。是ハ狂奇の制者ハ
人ちて。世ふ名を高く。辯して。ハ。ハ。出る。奇ハ。白く。皆玉をつゝ。

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』　請求記号 WA19-14　ガラス使用

ゝ者も此道をきゝのまれば。短冊に書からん句の裡句毎に新を綴
ゝもう。太郎といひ次郎といひ樹ひ〳〵拙何の上るも出ゆべき
何越よ。弱ちゝ〳〵は一二を手ふ。或呼寄の遠者ゝゝ寄
ゝぎもひの太鼓連能〻亭よ觸流〳〵てよう。淡ゝ〳〵やきゝ名傳
ゝゝう。相撲ゝゝの名ゝかふ五留ふ行司の国庵ゝゝを勤ゝ彼
年寄ゝもゝゝれふべき。先遊のゝ〳〵ゝちゝゝふ勝負を定ゝる出ゝ
ゝ〳〵ゝ。取組附ふ法いぶゝゝる。撰継集ゝゝ名のゝゝを付ゝれ出し
書ゝを色ゝゝゝゝれゝゝゝゝ

富本はふしのふ浮名をあらはす。豊名賀鶴賀の枝も葉えて。業も古げ坊ふるまものでゐ古きをたづねて新曲ぶし〜ぐら〜いふも思ひなれば。其ふしまをうぐれば。天満八古文の浣紗節ハ。吾嬬下りは祭文みな今ハ〜。鹿の武右衛門が仕形ハ。宇治牧場の落話ふしの〜〜みな。役軍書講は口調ふ倣て。一ツ二ツをあつふいそぐ。孔明関羽樊噲張良楠将門金時母慶其勢加合八人芸後陣ふしの〜〜ハ。稚児業。うげ芝居浮世物ハ絵の写絵。夢ノ名子妻の種ふ妻屋落ふ舐を雅ともる物ふて。一年三百六十日ふて夜を昼ふ接上ふ昼夜をとふ諸芸の数ハ八百屋業は神道講枝耳ふりの〜の狂云を舐て。心み此須のふをはふ〜たまへ。おそれも〜〜まをす。

○頼母太夫の改名を告ける詞

竹本豊竹の音曲ハ宇治井上の枝ふまさ〜〜音節墨譜を加筆ふ〜も。正本の奥出ふ師を針のごとくふ〜〜ふれど。矛ふハ椿のごとくふて。先師の原ハ浮ふて異ひもようふ。今狂行ふて下流を汲ム者多き中ふも名人上手を志ふ〜〜おいて。我ふ斎しきたぐひをいふ。垢のわけざる湯屋浮ふ。茶飯ふ顕ふ〜一口浮ふ。活ふふるこもじ〜〜て。独流ハ看病をふ似ふ。熱鉄の白湯を飲で。陰疾ふ浸ふ。を拭ふハ此道の天狗ふて。長く伸し短く縮て。ものれが自立ふ浮ふ。鼻をハ生ふ。仲人ハ通を失ふ見ぬ。何とふれば。上手ふ〜〜とハ神ふ〜〜て。下手を霞ふんとふるゆふふ。形ハ如意論。気音をふ心ハ妙音。財天を祈生ど。ぞちハ盃牙み。ふ〜〜ふて。利生ハ尽ざる仏の方便神〜さんのおかげふる。我慢偏執の心

たりてハ上達もすること難うぐしつこふ一チ人この関東ゞい。江戸なまり江
戸ざるロうゝ係くも出ることふ志しそ。思ひ入江よ立つ巷の節そうせぐみ
おぼつかうゝ。難役の梅の味ひさく。生繁物の上方なれとハいまゞいそ
ハ名下ほうゝ。彼鼓面の何ゞしふ名のゝ似ようふ八郎殿。矢蔵山れ
よゞ名不自由なんどちら引方引のふ吉遠井の歯ふようそ。三津の演
粧の異ひとちも祇やゝで。八津太夫の浮をゆくゝようゝ。例の拙き枝うれ
ば生志頼母ゝゝも異ハ名ゞしふ。浦最頁のゝ仕光と師の思の摩耗の
義ゆそゝふこゝび四名を濃交ゝゝ泰さふ。庶屋とゝふるのゝそ改名ゝ
義俗をくゝふ者ゝもとゝ。岩四を紀そよと雷ゝ庶ゞそ草ゝつゝ。
一ぢんゝめそ出ぎきを。今屋行お新ゝ出つふ捻ゝ志のゝふ。

○弥生庵魁丸ようゝ初の文

立国ハ雛屋と唱ゝ俗潜のゝ。ふ冠ゝう。眠獅ハ魁助ゝ係迷てく
哥舞妓の中ゝ玉ゝう。五ゝいふ冠とゝふ五の冠の内裡魁人形芝
居の俗侵ふも。近松は二の妹背山ゝ。魁の間度のゝる沼りを流
させ。山東京傳ゝの骨董集みそ。魁の雲化ゝまを考ゝう。
豊雛と呼ぶ彦妓ゝ名をゝてもづ本面屋を異ゝ。魁松と
ゝふ屋ゝ名ふ水偶人ゝうゝて。買ゝぶる人ゝをゝうゝう。
さるたぶひの魁ふゝうゝぶひれぶゝ芝ふおゝて世ふ寄ゝきゝ
人ゝう。庵を魁ゝつる弥生ゝ号け。名ゝ雛の本魁丸ゝゝ。おのれ
三馬ゝゝう人形の花笠似るゝのうふゝゝ魁要の緒の針生よ
ゝる金を鼠の交ゝ係くゝ。ゝう雛ふるき女ふゝうゝる。大法
紙いゝるゝうを思ゝ。魁ふゝひとゝき艶男ゝうゝを業螺荒

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14　ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用

の

こうり髪頭おろして。丸髷まろくうふ剃るようこんれば。ふくびく帯
鮭のこのみを生して。鮭絵本木田爺よりげづれるをもとりしぶ。
鮭幕は組紐ふさふしうづとて。通来四方髪ふたりくるくるしを。
四方の机おゆうして。姿を一對の鮭を盃。若侍の枕宮をも
まるびふん役物者の鬘をなれば。お芥子もちろうお奴うもたうふ
小人形のいろ白ふうも仏ろうん。ゆくは鮭八尾張町ふ本店乃廓
をいろいろ。伊勢に市店の翁は着しまるもの。ものをも
まるびす物店ふ芸店を備しして。数多や川岸ふ寄垣の翁
のようまくる。おらの夢ども。ちうわ茅町の鮭屋ば若めごろ面て
高ふの如く。日々窪は雛丸行御はをう美をもぐるぞ世ふるの如
寄人ようる。女ようくはてぶをいもぶ字毎ふ衣裳の綾錦牧

謡う。白毎ふ湯度の金銀をつくねて。香箱の去出要しき体ろう。
竹籠の花貝やきしき形ろう。咲つねる梅桜はくふ柳は本の
いくぶりをうめて。梅の本は今やくぶをとうくぶたるる間
の花瓶茶煙壺を左ふを見ても。いまぐ巻ふいづるのを学て
ぶ。重箱の組数月次ふ出れば。高坏の菱餅ふ芸て。稽籍の積りを
ねうう。白酒の燗ろやをぐちふよういづれば。食籠の豆数煙草砂糖
ぶくるふおなぐく。牡蠣と俗称体ろ。ろうもあち
鮭樽の上ものおせ下ふる。壺ぐて。粧をつもうるべ。去年べ
ぶくし樟脳色の紙めくるて。白ひ物ごとれ。ふ補ふを
うるぐ。今年結る雛菓子の京屋ばうて。味ひをきたぐひを
翻を。直ぐうるるるる中るも細工物ものら。るるを。裸

人形後折をとりて燻ひて蕃椒のかぐわふ泥こ古こ手かくびくる
哥ぐるい皆さき捨て耶ぼ名のくれば善二次郎右衛つきとびて
もくつふ名のる人も本面ひるひ河丸太ど改めて笠〳〵些さに
入生び毋月玉山とたきぎくる片こ哥よもの人笠も雛廼屋ひる
ハ面の屋ぐど名のりて物ぐく世もれふくそ也魅子の麓き点
とぶ如く孫生の庵の孫生義るぼぶふ魅屏風の隅ものもつて
このきる人〳〵ぼぶして咲くぐの泳初き〳〵いよ〳〵賑ハ〳〵ものう俗さり
哥骨牌の哥遊び〳〵て四の皆うひるる美をもうふることを松兵で
くきたん〳〵ぶれ出ぐくもの〳〵ぐ招ふ〳〵ぶふく荘の脊
ふ面ぐ付る物松のたぶのふ登りて雛箱の番附ようぐめたりき
まをるふ収納場ふるる人〳〵の肩衣ものを合ひてくひらぎをれ

るハ曾祖母のりくり〳〵雛子方の魅ふ作きて蔵き俄き
折まぐる衣装ふ赤き黒き云まぐて出ぐ〳〵湯度りくしをる
物ぐて六ッ七ッ物〳〵る物ぶ〳〵るぐの壁ふようて行隅ふ居流
きて〳〵う茶のふお紙子りうお盃りうお祝蓋茶ふのをて供御そる
るぐ〳〵ぐる魅子面お行儀ふ芸びて〳〵いつふそれいものこるた
似て世ぐびの人ふ又欲くき酒をもきしめぐ〳〵菜とれやること
ふ面をて七居錆始ふまひて〳〵ぐふもやぐり〳〵されば交易をキふ
人を茅岩の骨折をもぐて〳〵必物を買れぐ茶屋上るの苦
ふ鬱きて〳〵二階を下る者りう食礼をゆるもれて〳〵魅尽の松縁
を頂くるぐ〳〵按摩始まるの夢を独て〳〵交易をもうふその
りう物を貯て〳〵魅煙ふ銜る癡人なるぐ〳〵上戸の新ふ紅葉

を焚て酒肴が酒をのくるもしらで被なをとる若い三人南瓜
の毒付うと称して下戸の後ふ蕎皮と味て蕎麦の茶を飲ぞれば
上下を着る藩侯ハ五人離るの人形と異るもの〳〵雑煮の膳
を正しく坐頃ハ毛氈の上ふ突まる中るも判若ふきぶてる或ハ若
る糸細工の神兄が緋袴のお揉ふ竜ル水るふ似て漬り物の古雑煮
の古きとふのうやうにうん久しゆを戒なぐつかきうぞふれば
二十三年ハ[illegible]ふ清藩の判若ふきぶてる若ハ[illegible]雑
煮ハ[illegible]の[illegible]生魔の泳初を[illegible]其[illegible]

清人ハ[illegible]の本面屋
名きく古今のなぐふ雑丸

武亭狂文集初編上畢

7
3
89

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『式亭狂文集稿本 3巻』 請求記号 WA19-14

ガラス使用